

報道関係機関と地球研との懇談会

2018年 2月21日(水) 14:00~15:15

京都烏丸コンベンションホール 会議室3

〒604-8162 京都市中京区烏丸通六角下七観音町634 TEL. 075-231-6351

司会進行：遠山 真理^{とよやま まり} サイエンスコミュニケーター

1 開会挨拶

窪田 順平^{くぼた じゅんぺい} 副所長

2 講演会・セミナー・受賞などのお知らせ

第21回地球研地域連携セミナー滋賀 「地域の底チカラ 結の精神が育むいきものの多様性」

2018年2月24日(土) 12:00~16:30

かふか生涯学習館 2F 研修室

講師：中村 浩二

(金沢大学客員教授(名誉教授)・能登里海里山マイスター)

いきもの観察会の成果発表：甲賀市立佐山小学校 児童

パネルディスカッション：

浅野 悟史 滋賀県琵琶湖環境科学研究センター 研究員

河合 定郎 農業法人有限会社甲賀もち工房 代表取締役

松沢 松治 マザーレイクフォーラム運営委員長

コメンテーター：

中村 浩二 金沢大学 客員教授(名誉教授)

奥田 昇 総合地球環境学研究所 准教授

コーディネーター：脇田 健一 龍谷大学 教授

サイドイベント：地域特産品フェア、いきもの展示、餅つき 他



地球研地域連携セミナーは、世界や日本の各地域で共通する地球環境問題の根底を探り、解決のための方法を考えていくことを目的に、地元の大学や研究機関、行政機関などと連携して開催するセミナーです。第21回となる今回は、滋賀県甲賀市にて開催いたします。

甲賀の大地に広がる古琵琶湖の肥沃な土壌は豊かな自然や生きものを育み、伝統的な生業や文化を培って

きました。しかし、中山間地域では、農家の減少や高齢化、後継者不足が進み、耕作放棄地がみられるなど、集落の存続が懸念されています。さらに、里山などの身近な自然環境にも人の手が入らなくなるため荒廃が進み、かつてみられた生き物のにぎわいも少なくなっています。

本セミナーでは、身近な自然の価値に共感・共鳴し、その恵みを将来の担い手に受け継いでいくために、結の精神で集落をまとめ、農業の6次産業化や、豊かな生き物を育む水田作りに取り組む甲賀の小佐治地区の事例を紹介しながら、中山間地の農業・農村集落の未来について皆さんとともに考えます。

第154回地球研セミナー 「市民自治力向上とアクションリサーチに関する研究～協働型アクションリサーチの実践～」

2018年3月13日（火）15:00～16:30

総合地球環境学研究所 講演室

講師：草郷 孝好（関西大学社会学部・教授）

国連のSDGsが標榜する持続的発展に沿う地域創りには、地域住民が地域資源を活用し、主体的にアイデアを出し、活動することが必要とされ、そのためには、地域コミュニティの自治力がカギを握る。この問題意識に立ち、関西大学経済政治研究所は「市民自治力向上とアクションリサーチに関する研究」に取り組んでいます。そこで、今回のセミナーでは、同プロジェクトの研究活動をもとに、地域コミュニティの自治力向上に関する協働型アクションリサーチ事例を紹介することで、協働型アクションリサーチの必要性と概要、研究者の立ち位置や当事者（地方行政や地域住民）との関係性などについて考えます。

最近のトピックス

岸本紗也加研究推進員が日本環境教育学会「研究実践奨励賞」を受賞

2017年9月2日～3日、一般社団法人日本環境教育学会第28回年次大会（岩手大学）において、地球研・岸本紗也加研究推進支援員の発表「『地球環境学』を活かした環境教育の実践と課題」が、第13回研究・実践奨励賞を受賞しました。本賞は、環境教育の研究・実践の発展に貢献している取り組みに対して授与されるものです。

増原直樹プロジェクト研究員が日本計画行政学会第40回全国大会にて優秀発表賞を受賞

2017年9月8～9日、日本計画行政学会第40回全国大会において、地球研・増原直樹プロジェクト研究員と東京都市大学・馬場健司教授の発表「地熱・温泉資源量と開発目標、規制と紛争の実態—全国47都道府県別の分析—」が、優秀発表賞を受賞しました。

地球研砂漠化プロジェクトメンバーが SOSTierra2017 International Conference において優秀論文賞を受賞

2017年9月14～16日にスペイン・バレンシアで行われた SOSTierra2017 International Conference on Vernacular Earthen Architecture, Conservation and Sustainability において、地球研プロジェクト「砂漠化をめぐる風と人と土（プロジェクトリーダー：田中樹）」（FR 期間 2012 年度～2016 年度）のメンバーが発表した”Transforming Kassena house and indigenous building technology in Burkina Faso” が「優秀論文賞」に選ばれました。

船水尚行教授が環境省環境再生・資源循環局長表彰を受賞

2017年10月10日、地球研・船水尚行教授が環境省環境再生・資源循環局長表彰を受賞しました。本賞は、浄化槽に関して特に有益な発明・発見もしくは研究考案等を行ったものまたは浄化槽に関する教育もしくは啓発・普及活動に従事し、特に顕著な功績があったと認められる者に対して表彰されるものです。

中塚武教授が地球化学研究協会学術賞「第45回三宅賞」を受賞

2017年11月、地球研・中塚武教授が地球化学研究協会「第45回三宅賞」を受賞しました。「地球化学研究協会」は、地球環境を化学的な手法によって研究する学問である「地球化学」が、地球の進化や将来を考える上で様々な分野とも深く関わり、人類の生活環境を守り、地球資源を人々により役立つものとするために不可欠な学問であることから、その研究の推進と普及をはかるために設立されたものです。このたび中塚教授の受賞した「三宅賞」は協会の設立者故・三宅泰雄博士を記念して作られた賞で、地球化学の研究に顕著な業績を収めた科学者に贈呈されるものです。

サニテーションプロジェクトのメンバーが 1st Euro-Mediterranean Conference for Environmental Integration Best paper award を受賞

2017年11月22～25日にチュニジアにて行われた 1st Euro-Mediterranean Conference for Environmental Integration において、地球研プロジェクト「サニテーション価値連鎖の提案ー地域のヒトによりそうサニテーションのデザイン」のメンバーが発表した論文が Best paper award を受賞しました。

栄養循環プロジェクトが淡海の川づくりフォーラム準グランプリ「専門知が農の未来を変えるで賞」を受賞

2018年2月4日に行われた第11回淡海の川づくりフォーラムにおいて、地球研・石田卓也研究員と滋賀県環境科学研究センター・浅野悟史研究員が発表した地球研・栄養循環プロジェクトおよび小佐治環境保全部会の活動内容「研究者との協働による水田生態系の再生活動」が準グランプリ「専門知が農の未来を変えるで賞」を受賞しました。

本賞は、流域・地域の情勢も踏まえ、「水辺と私たちの共生」、「水辺と私たちのいい関係」のモデルとなる活動に対して与えられるものです。



ボードゲームで環境問題を遊びながら学ぶ

おう ともひろ
王 智弘

地球研「アジア環太平洋地域の人間環境安全保障—水・エネルギー・食料連環」
プロジェクト研究員

地球研は 2011 年度から地球研オープンハウスを開催しています。例年夏休み期間中の平日に行われることもあり、来場者の多くが小学生です。

各研究プロジェクトも催しを企画するのですが、どんな工夫をしたら、子どもはもちろん大人にも、環境の問題、プロジェクトのテーマ、研究の面白さを伝えられるのか、毎年、思いをめぐらせます。そこで今年度は環境問題がテーマのボードゲームを製作しました。イベント名は「ゲームで学ぼう。食とエネルギー」です。漁師さんになったプレイヤーが漁獲高を競うゲームです。ただし、高く売れる魚は島から遠い海域にいて、船コマを動かすには燃料（エネルギー）が必要です。その燃料の価格はサイコロの目で上下します。同じ海域で魚をとり続けると資源が減少・枯渇してしまいます。資源量の増減、燃料価格の変動、相場、他のプレイヤーの行動を考えながら、自然と社会の条件が絡み合う環境の問題を疑似体験するゲームです。ここ数年、地球研オープンハウスでゲームづくりに挑戦する研究プロジェクトが続いています。世間ではいわゆるアナログ・ゲームが流行の兆しを見せています。「地球環境問題の根源は、人間文化の問題にある」は地球研のテーゼです。他方、ヨハン・ホイジンガは『ホモ・ルーデンス』の中で「文化は遊びの形式のなかに成立した」と書いています。それならば、「環境問題の根源は遊びの問題にある」とはいえないだろうか。そんなことを考えています。



大人も子どもと一緒にゲームをする 限られた燃料を使ってどこで何を獲るか、指折り数える



地域と「つながる」同位体情報

たやす いちろう
陀安 一郎 地球研 研究基盤研究センター 教授

大気や水、生き物など、私たちの周り
にある環境は変化しています。この変
化とつながりを捉える方法として、私
たちは「安定同位体手法」を駆使して、その原因や動態などを
研究しています。例えば、有名な大気中の二酸化炭素の上昇グ
ラフがありますが、それと同時に「二酸化炭素の炭素同位体比」
も化石燃料の影響で変化しています。このように、元素分析お
よび安定同位体分析を用いて環境の変化とつながりを捉える
手法を、地球研では「環境トレーサビリティ手法」と呼び、
具体的な環境研究に適用しています。
具体的には、こういった手法を用いて、山梨県忍野村、福井県大



調査地の一つの山梨県忍野村 富士山に端を発する地下
水の流れと忍野八海の湧水のつながりを研究している

野市、兵庫県千種川流域、愛媛県西条市、岩手県大槌町などの各自治体や地域住民の方々と共同で研究を行っています。特に、目に見えない地下水の流れや、物のつながりの把握などに関して安定同位体手法は役に立ちます。さらに、こういった研究のつながりを経て、同じような課題を共有する方たちの「つながり」も出てきました。このような、いろいろなつながりについてお話しできればと考えています。



〈あたりまえ〉のすばらしさを共有する映像の制作

しまだ なほこ
嶋田 奈穂子 地球研 研究基盤国際センター研究推進員

「PR 映像」というのがあります。私が育った町には世界遺産の寺があり、自分の町の PR 映像を見る機会が多くありました。ただし、どれだけ美しい寺や町並みが映っても、いつも他人事のようなものでした。たぶんそれは私にとって〈あたりまえ〉の暮らしの風景ではなかったからです。

宮崎県北の5町村で、昨年度、地域の将来像に関する研究の一環で映像を制作しました。地元の〈あたりまえ〉のすばらしさを共有するためのもので、視聴対象者は、〈地元暮らし人〉でした。この地域は、きびしい自然環境のなかでの農業の営みとその景観、そしてその農業を支えてきた人と人、人と自然の連綿とつづく密なつながりが評価され、2015年に世界農業遺産に認定されました。このすばらしさは地域の暮らしそのもので、地元の人にとっては〈あたりまえ〉のことでした。地域の将来像を地元の人が描こうとするとき、地域の課題と魅力の両方を理解している必要となります。課題は目につきやすく、〈あたりまえ〉のことは見えにくい。だから、この地域の〈あたりまえ〉を地域の人に見せるための映像が必要だったのです。ただ、よそ者の私たちには、どんな風景や音が地元の人にとって〈あたりまえ〉なのかわからず、製作は困難でした。そこで、地域の高校生とそのご両親、おじいちゃん、おばあちゃん、町で働く方にヒアリングを重ねました。そこで聞く地域の暮らし、思い出、未来についての考えをそのままストーリーにし、そこで聞いた言葉をつなげてナレーションにしたのが「世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域ショートドキュメンタリームービー」です。ふるさとを離れて暮らす娘に見せたい、何かグッとくる、という地元の方々の言葉をいただき、これからこの映像をどう活用していくのかに思いを巡らせています。



映像の中心となった高千穂高校生ロケ風景



研究者と向き合う一行動を促し、地域に人をどう「巻き込む」か？

みむら ゆたか
三村 豊 地球研 研究基盤国際センター研究推進員

わたしは建築学を専門として、おもにインドネシアのジャカルタ都市圏の土地利用について建築・都市の歴史的な変遷をテーマに研究しています。その傍ら、日本の中山間地域のフィールドワークを通して、文理融合のアプローチによる研究活動を行っています。さまざまな分野の研究者と向き合うようになって、今年で5年目になります。中山間地域でのフィールドワークは、滋賀県高島市朽木（2015）や和歌山県東牟婁郡古座川町（2016）、アフリカのザンビア南部州（2016）、さらに、高知県長岡郡大豊町（2017）で地域の方々より教わる姿勢で勉強しています。

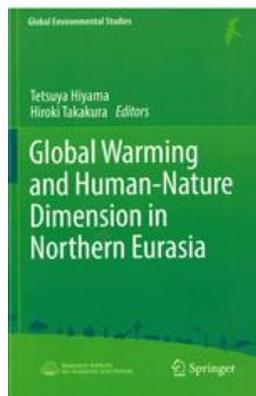
今日、国立大学では学部や研究科の再編制が進み、文系科目と理系科目を学ぶ「高い分野の転換」が積極的に取り組まれています。しかしながら、文理融合のアプローチを実践することは必ずしも容易ではありません。フィールドでの振る舞いや態度によって軋轢が生じるところもありました。そのような経験から研究者の態度に興味を持つようになりました。態度とは、他者がいることで成り立ち、行動への身構えでもあります。言い換えれば、この身構えをほぐすことで、行動を促し、巻き込むことが可能になるかもしれません。つまり、研究者と向き合うことは、同時に地域社会や組織と向き合うことの知恵を育みます。わたしたちが暮らす日本は、世界でいち早く人口減少社会に突入しました。人口減少が顕著に見られる中山間地域では、I ターン者の活動の場が提供され、次世代の人材を地域内外から定住を促進させ、新しい地域社会のあり方が模索されています。わたしは、様々なステークホルダーの「主体的な深い参加」の仕組みを明らかにすることが、持続可能な地域社会へと向かうと考えています。



研究者ダイアログとして、小冊子「フィールドぶらり」を刊行
本冊子は、さまざまな分野の研究者が、同じ釜の飯を食べ、同じ時間を共有し、同じフィールドで見聞きする、研究者間の対話の記録

4 出版物その他

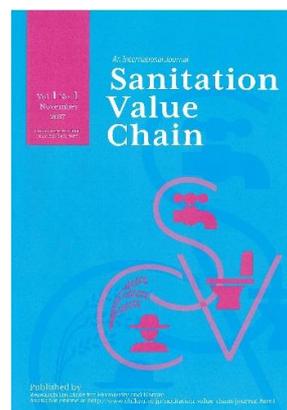
●地球研和英文学術叢書



●ニューズレター



●刊行物・冊子



そのほか、会場にてご用意いたします。

地球研ホームページ <http://www.chikyu.ac.jp/>

最新論文の掲載を新たに始めました！

<https://www.facebook.com/RIHN.official> <https://twitter.com/CHIKYUKEN>

イベントのお知らせや研究会の様子など日々更新しています！

<https://www.youtube.com/user/CHIKYUKENofficial>

過去に行ったイベントの動画や、不定期でシンポジウム等の同時配信を行っています！

<http://www.chikyu.ac.jp/publicity/iTunesU.html>

過去に行ったイベントの動画やフィールドで撮影した動画、教育コンテンツなどをアップしています！

懇談会についてのお問い合わせ



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
Research Institute for Humanity and Nature

広報室 遠山・北・木村

TEL: 075-707-2430 (直通)

FAX: 075-707-2106

E-mail: kikaku@chikyu.ac.jp